ヨミダス　読売新聞　【令和8年】2026.5.14(木)　東京朝刊　千葉　21頁　1152文字
淑徳大学
2026年05月21日 14:54

淑徳大 読売 共同千葉県調査 2

ペット防災「行動面」課題

預け先確保など1割未満

第2回「淑徳大・読売新聞共同千葉県調査」では、県内のペット（犬、猫）の飼育状況と自然災害への備えについて尋ねた。回答した4353人のうち、犬のみの飼育者347人（8・0％）と猫のみの飼育者373人（8・6％）の備えを分析した。「モノ」の備えが進む一方で、「行動」の備えが遅れていることがわかった。

ペットフード（5日分以上）やトイレ用品など、日常生活の延長で準備できる物資は約半数が備蓄していた。ただ、備え方は犬、猫で異なる。

犬ではキャリーバッグやケージの準備（39・5％）、首輪やリードの準備（44・7％）と、日常の管理にもつながる備えが比較的進んでいる。猫ではキャリーバッグやケージが49・6％と約半数だが、首輪やリードは19・3％にとどまる。避難時にケージなどで移動させることを前提にしているためとみられるが、脱走を防ぐための猫の首輪やリードの重要性も指摘されており、備えは必要だろう。

2022年6月から、ペットショップやブリーダーが販売する犬、猫には、逃げ出しても飼い主がすぐにわかるようにするため、マイクロチップの装着が義務づけられた。装着率は犬が34・6％で、猫の14・2％の2倍以上だ。ペットフード協会の調査（25年）によれば、犬の8割弱はペットショップかブリーダーから購入されている。猫はその割合が約4割と低い。その差がマイクロチップの装着率に表れているとみられる。

◇

災害時に重要となる行動面の備えについても尋ねた。迷子になった時の捜索や保護された時の身元確認に必要な「ペットの写真の印刷・データ保存」は犬17・0％、猫13・7％にとどまる。さらに「一時的な預け先の確保」（犬8・6％、猫4・3％）、「最寄りの避難所の受け入れ体制の把握」（犬5・2％、猫3・8％）、「同伴避難訓練への参加」（犬4・3％、猫2・4％）の順で低くなり、いずれも1割未満にとどまっている。

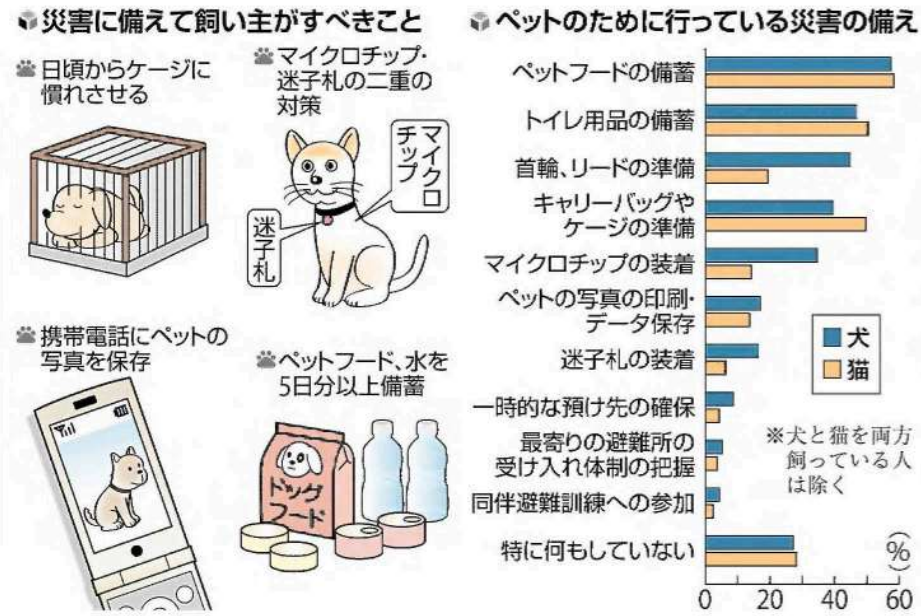
避難所での受け入れ体制については、県によると、県内全市町村にペットを同行できる避難所があるという。避難時や被災後の行動に直結するので、確認しておいた方がよいだろう。

◇

一方で、犬の飼育者の27・1％と猫の飼育者の28・2％は「特に何もしていない」と回答。3割近い人が対策を何も取っていないことも明らかになった。

人（自分や家族）への備えとペットへの備えは関連性がある。人への備えをしている人のうち、ペットへの備えもしている人の割合は84・6％に上る。しかし、人への備えをしていない人では、ペットへの備えをしている割合は24・6％にとどまった。ペットへの備えを進めるには、飼い主自身の防災意識を高めることが先決だ。

（青柳涼子・淑徳大コミュニティ政策学部教授）



(C)読売新聞社 無断転載・複製禁止。放送、出版等での二次利用の際は読売新聞社 記事利用担当（mail: t-chizai06@yomiuri.com tel:03-6739-6961)まで